

柳生の金魚



柳生の金魚

山岡莊八

東京文芸社



柳生の金魚

四八〇円



0093-703401-5170

昭和四十五年十月五日印刷
昭和四十五年十月十日発行

著作者 山岡莊八

発行者 角谷奈良雄

発行所 株式会社東京文藝社

本社 東京都新宿区西大久保三一二六
出張所 東京都新宿区弘方町一番地

振替・東京二一七五七
電話・(三三〇)二五五〇

目次

柳生の金魚	五
念志ヶ原の妻	四
頼朝勘定	五
本阿弥辻の盜賊	五
五両金心中	六
安土の密譚	一七
おふうの賭	一三

おせんと沢庵

一四

八弥の忠義

一五

親鸞の末裔たち

一七

売ろうもの関白

二二

一両二分の屋敷

三九

一つ目達磨

四五

山吹女房

五九

装幀 中尾 進

柳やなぎ
生う
の
金きん
魚うしよ

その日は、天草の一揆を鎮圧して江戸へ帰り着いた松平信綱と戸田氏鐵から、將軍家光に征討始末の復命があった日であった。

その復命に陪席して、総目付の詰の間に引きあげて来る途中の大廊下で、柳生但馬守宗矩は、同朋衆の佐野福阿弥にいんぎんに祝儀を述べられ、その時にはそのまま軽くうけ流して行き過ぎた。

「——お芽出度う存じます。これで、柳生家も、万々歳でござりまするなあ」

頭の中に雑然とした一揆の感慨が去来している時だけに、初めの「お芽出度う」は天草の乱の治まったことだと思ひ、「これで柳生家も万々歳」そういわれた時には、
(あ、十兵衛が帰って来たことか)

簡単なひとり合点で、詰の間に入った。

そういえば、伴の十兵衛三蔵が発狂を装って、家光の許を辞してから十三年経っている。その十三年間のうち、十年近くを十兵衛は諸国漫遊という名で廻国の旅をつづけた。いちばん長く滞在したのは九州の薩摩で、他国者は殆んど領内に入れないはずの島津家としては、稀有の待遇であったといつてよい。十兵衛が兵法慢心の果ての武者修業と、世間に信じ込まれるほど巧みな佯狂ぶりだ

った故もあるが、何よりも島津光久が宗矩に誓書を入れた柳生新蔭流の門下であり、柳生父子の目的などよく見抜いていながら、知らぬふりをして師の伴を庇護してくれた故でもあった。

何しろ島津家までが、勝手に領内への出入りを許すのだ。他藩で拒めば角が立つ。そこで十兵衛は、天草の乱の前からつづぎに西国諸藩の向背から、軍備、軍用道路の有無まで調査し得た。聞くところによれば、薩摩ではある女子との間に子供まで残して来ているとか……。

その十兵衛が、乱も終わったからというので、十三年ぶりに家光から再び召出されて、御書院番を命じられた。

永年の発狂もようやくおさまって、柳生正木坂に建った劍禅道場で、ひたすら兵法の研鑽にはげんでいたので、
「——殊勝なり。帰参を許すぞ」

というのが表向きなのだから、同朋衆(茶道衆)がお芽出度うといつても、これで柳生家も万々歳といつてもおかしくない。

実のところは、そんな簡単なものではなかった。これから柳生十兵衛三蔵の、ほんとうのご奉公がはじまるのだが、それはまだ知っている者は至つて少い。家光と宗矩と、そして出来上ったばかりの品川東海寺の沢庵禪師の他はなかるう。

(いや、あるいはあの福阿弥も、幾分気付いていてい

たのかも知れない)

同朋衆の中では、ただ古株だというだけではなく、眼から鼻へ抜けるほど頭の回転の早い男だ。伊達政宗も彼の鼠負で、年々黄金十枚のつけ届けをしている、と笑って話したことがある。茶道衆にならなかつたら、大名の側用人くらいは十分に勤まる男だ。

と、その福阿弥が、すぐまたうやうやしくお茶を捧げて、詰の間へ入って来た。

「お疲れでござりましょう。しかし、松平伊豆守さまご元氣でござりました」

「そうよ。上様も、これでホッとなされたことであらう」

「それに引きかえ、板倉さまは……いや、討死なされた板倉さまだけではござりませぬな。軍法を犯したとかいう噂の鍋島さま、榊原さまなど、まだ生きた心地もござりませぬ」

福阿弥は気軽に軽口をたたいたあとで、またいった。

「それに引きかえ柳生家は、重ね重ねのお仕合わせ、ほんとうにお芽出度続きで結構でござります」

「なに、お芽出度続き……?」

「はい。十兵衛さまお召出しに続いて、刑部少輔さまはいよいよご大身のお大名とか、営内では、みなその噂で持ち切りでござります」

とたんに、宗矩の眉は曇った。

「福阿弥、刑部少輔について、どのような噂が立っているのじゃ。わしは知らぬぞ。聞かせてくれぬか」

それをどう受取ったのか、福阿弥は声を発して笑っていった。笑うと両耳が兎のようにピクピク動く福阿弥だった。

二

「私の耳は地獄耳、というて、聞きもせぬことまでご鼠負の柳生さまに、何でわざわざお追従を申しましょや」

福阿弥は、宗矩が知っていながら空とぼけているのが憎いといって、また笑った。

刑部少輔というのは、十兵衛の弟で、今年(寛永十五年)二十六歳の左門友矩のことであった。

友矩が家光の側小姓に召出されたのは、十兵衛三蔵が発狂を装って、家光のそばから姿を消した寛永三年の翌年だった。

そして、そのさらに翌年には、友矩の弟の宗冬(後の飛騨守)もまた、召出されて仕えている。

この左門友矩と宗冬とは同じ年に生れた兄弟で、二男の友矩は妾腹、三男の宗冬は十兵衛とおなじ正妻松下氏からの出生であった。

こうして二人は、共に家光の側小姓にあがったのだが、その出世ぶりは見る間に大きく開いていった。

兄の左門友矩は二十二歳で現在の父と同じ従五位下に叙され、刑部少輔に任ぜられて二千石。寛永十一年の將軍家光の上洛のおりには、徒士頭かきしらとして、側から離さぬ寵臣になっていた。

それに引きかえて弟の宗冬は、いまだに手当て二百俵の小姓にすぎない。父の日から見ても二人の才能、努力ともに大きな差があった。

宗冬は読書が好きで、兵法ぎらい。その上、無口で陰気であった。それに引きかえて、友矩は才氣渾発、腕も十兵衛にこそ及ばなかったが、近臣の中で齒の立つ者はなかった。いや、それだけではなく、これはまた、父の宗矩が眼を見るほどキリリと締った美男であった。

決して、親の鼠負眼からではない。福阿弥にいわせる、「千代田城中、才色無雙」という。それがどんどん出世するので、衆道（男氣）好みの將軍が友矩を溺愛し、それで出世が早いのだという苦々しい蔭口も、当然立っていた。

宗矩は、そうした噂はなるべく聞かないようにして来たのだが、二男友矩の美男ぶりには、いささか自信を持っている。

どうやらこれは公卿出身の祖母、春桃御前の京の血の

影響らしい。

宗矩や十兵衛は祖父の石舟斎によく似ていたが、この友矩と、友矩の従兄に当る兄殿勝の三男権右衛門とは、一族の中でまるで人種が違うように、際立った美男であった。

この柳生権右衛門は、いま仙台の伊達藩に師範として仕えているのだが、これも仙台一の美男と評判され、あらぬ噂を立てられて困っているという。

「——美しく生まれたことは、何も彼等の罪ではない」いや、醜く生れるよりは、相手の眼を柔しませるだけでもよいのではないかと、宗矩はいくぶん得意で蔭口を聞き流して来ていたのだが、今日の福阿弥の言葉は聞き捨てならなかった。

同朋衆といえば、江戸城内の……というよりも、それれ鼠負の諸大名に、噂と情報をふり撒いてゆく現今の放送局だ。

福阿弥は、その中でも最も精緻なアンテナを持った一方の雄、といつてよい。それが、嫡男の十兵衛が書院番として再び仕えることになったのを祝ってくれただけではなく、二男の刑部少輔友矩が、近々大名に取立てられる……それも「ご大身——」と口を滑らせたのだから、聞捨てには出来なかった。

「ほんとうに、但馬守さまはご存知ないのでござります

るか」

「知っているにもいないにも、そのようなことはありやうの無いことじゃ」

「これはおどろきました！」

福阿弥は真顔になって、額を叩いた。

「いよいよ鳥原の乱が片付き、これから諸侯の大移動がはじまってゆく。原城は取りこわれ、鳥原の城主松倉さまは封を没される。いや、唐津の寺沢さまも領地を削られずには済むまいし、だいぶあちこち空城が出来てゆく」

「それと、刑部少輔と、何のかかわりがあるというのだ」

「肥前の鳥原城には高力忠房さま、肥後の天草には山崎家治さま……と、すでに決った。したがって江戸の近くにも、あちこち城が空く。御高は十万石を越えるであろうが、どこが、刑部少輔さまのお城になるのかと、われ等仲間では大評判にござります」

柳生宗矩は啞然として、福阿弥を見返した。

福阿弥は、決して担いでいるのではないらしい。笑いを納めて真顔でいうのだから、そうした噂が立っているのは事実には違いない。それにしても、まだ二十六歳の友矩が十万石以上の大名に挙げられることは、何という悪意にみちた噂であろうか……？

これだけの乱の後なのだ。少々の転封国替は当然ある。しかも、それは幕府の総目付である柳生宗矩、秋山正重、水野守信等の意見によって、老中が協議を重ねて決定してゆく重要事項だ。宗矩が知らぬはずもなければ、知らぬままに決定してよい事でもない。

第一、そんなことがあったら、世間は何というであろうか。乱に先立って、兄の十兵衛は西国に密国している。諸大名の向背を探るだけではなく、いったん開戦となった場合に、どこからどこへ、どのような軍兵の移動が出来るか？ そうした地勢や道路の調査は、すべて十兵衛苦心の報告にもとづいて立案されたものなのだ。

むろんその間に、幕府最初の総目付として、宗矩もまた、あらゆる枢機に参画している。ここで二男の友矩が大名などになってみよ、兄の苦心も、父の奉公も、すべては立身出世のための腹黒い画策であったと誤解され、永遠に蔭口されるに違いない。

「これは悪性の噂じゃぞ、福阿弥」

そういつた時には、宗矩の眼は血走っていた。

「われ等はご譜代ではない。それに、過ぐる年（寛永十一年）の伊賀越えの仇討ちに、荒木又右衛門が旗本衆ご最負の河合又五郎を討って以来、旗本衆の強い反感を買っている。それと関わりある気がしてならぬゆえ、この噂が決して市中に出ないよう、呉々もそなたに頼みおく

ぞ」

こんどは福阿弥が、茫然とした顔になった。

「すると、これは、根も葉もないこと……と、おっしゃりまするか」

「あつてよい事ではない。わしは、お役儀とはいへ、全国の大名家から旗本のご大身まで、ご奉公に乱れなきやを監視せねばならぬ身じゃ。そのわしが、他家を潰しておいて、そのあと釜にわが子を……そのような恥知らずの事が出来ると思ふか」

「でも、刑部少輔さまに、上様がお墨付を下されたのは、もうずっと以前、そうそう四年前のご上洛のご帰途、久能山にお立寄りなされてご一泊されたおり……と、専らの噂でござりまするか」

「何れにせよ、そのような噂は悪意の捏造、ありようのない事じゃ。こなたが考えても出所は想像つくであらうが」

きびしい声でそういわれると、福阿弥も口を閉すより他になかった。

そういえば旗本八万騎の中には、例の荒木又右衛門の伊賀越え事件以来、露骨に柳生一族に反感を示す者が無いでもなかった。

荒木又右衛門は、いうまでもなく柳生宗矩の愛弟子。いや、一時は又右衛門に柳生新陰流の技法を継がせよう

として、それで宗矩の若いおりの名「又右衛門」を名乗らせたほどの仲なのだ。

したがって、今でも旗本衆が挙つて味方していた河合又五郎を、わざわざ柳生に近い伊賀の地へ誘き出し、荒木又右衛門に討たせたのは宗矩の智慧であろう、と邪推している者が少くない。

それに、もう一つ刑部少輔友矩のあげられた「徒士頭——」という役目も、確かに一部の反感を買っていた。

徒士頭は將軍他出の供頭。さすれば旗本たちは、まだ若い友矩の指揮下におかれることになる。しかもそれが、内裏雜に大小差させたような端麗な美男なのだ。大奥の女たちはとにかく、同年輩の男共には、それだけでも十分反感の種になりそうだった。

「わかったの、この噂、これ以上にひろがらぬよう、特にこなたに頼んでおくぞ」

福阿弥は、もう一度半ば首を傾げたまま、

「但馬守さまがご存知ない……とすれば、これはたしかにおかしなことで」

呻くようにいって、頭を下げた。

三

相手が佐野福阿弥でなければ、柳生宗矩はあるいはこの不快な噂を、それほど気にはかけなかったに違いない。

宗矩が日本中の大名の向背に、伊賀、甲賀の隠密から、兵法の弟子たちを通じて、あらゆる神経を配っているように、福阿弥の柳営内の情報には、彼の名譽と生活のすべてがかかっている。

彼等が幕府から支給されているのは、せいぜい二十人扶持。したがって、彼等の収入の大半は、登城して来る大名の「つけ届け」という盆暮れの祝儀であった。

盆に一兩、暮に一兩。そんな旗本の大身や小大名から、盆に五枚（大判）、暮に五枚というような大々名に至るまで、それぞれ勝負が決っていて、着換えの手伝いから弁当の運搬、茶運び、走り使いの他に、柳営内の情報を売って生きているといつてよい。

それだけに、もしその情報が間違っていた場合は、そのまま信用に影響し、大切なお得意先を一軒失うことにもなる。したがって、彼等もしんげんに情報源を求め、特に佐野福阿弥は、家康、秀忠、家光と、三代にわたる同朋衆で、つい一昨年まで生きていた伊達政宗が、

「——あやつめの噂には、とにかく三分くらの根はあるわ」

そういうって、三分の福阿弥、三分の福阿弥と目をかけたほどの男であった。

その福阿弥の言葉だけに、宗矩は気にかかった。そこで下城すると、当時住んでいた麻布日ヶ窪の屋敷へ直行

しないで、今は刑部少輔友矩に明け渡してある八重洲河岸の旧屋敷に、馬を乗りつけた。

気にかかるといえば、二十六歳になって、まだ友矩が少しも異性に関心を示さず、独身である事が、今日は妙に心にひっかかった。

柳生家には晩婚の風があり、宗矩自身も、家康のすすめ、旗本松下嘉平次の孫娘を妻に迎えた時は三十歳に近かったが、しかしそれまでに女子を知らないわけではなく、修業中にそれで苦しんだ覚えがある。いや、その煩惱の虜になってはと、それが禅に近づきつきっかけになったといえる。

（もしや友矩め、いまだに將軍家に、愛されているのではなからうか……？）

馬を降りると、案内も乞わずに友矩の居間に近づき、「おお、帰っていたか」

入口に背を向けて、縁側で何かのぞき込んでいる友矩に声をかけた。

「そんなところで、何をしているのだ」

「ああ、お父上。これは珍らしい金魚でございます」

「なにキンギョ？」

宗矩も縁へ出て来て、友矩の手許をのぞき込んだ。

「なるほど、これは見事なものだ。容れものは瑛璃（硝子）のようだが、いったい、どこからこのようなのを

手に入れたぞ」

「はい。大和の郡山では、今これを熱心に飼いふやしているそうで、大河原村の庄屋がわざわざ届けてくれました」

「そうか。これが話に聞いた金魚か。まるで牡丹の花びらを落したようだの」

「この白い肌と紅斑の鮮やかさ！ 同じ魚でも、このように美しいものは、キッと人に愛されます。私はこれを、江戸中にひろめてやるかと思つていたところで」

「なるほど。何程の値か知らぬが、これならばよるこばれようなあ」

「これは鮒の仲間で、唐渡りなそうで」

「そうであろう。日本では見かけぬ魚じゃ」

「唐の江西省とか申すところから、はじめて渡つて来たのは足利時代。それから種を絶やさぬように、郡山ではずいぶん苦勞をして来たそうで。私はこれを先ず第一に、將軍家へ献上しようと思ひます」

將軍家と聞くと、宗矩はふつとまた、眉根を寄せて座敷へ戻つた。

「刑部、今日はこなたに問いたたいたことがあつて来たのだ」

しかし、友矩はよほど金魚が気に入っていると見えて、まだ玻璃の器をのぞきこんで動かない。

「刑部、これへこられよ。大切な話がある」

「はい。この大きなのを二尾献上するとして、しかし容器がこれでは粗末。もう少し大きなものが欲しいと存じます、お心当りはありませぬか」

「金魚の話は後にせよ」

「は……」

「まあ、ここに坐らっしゃい。そして父の問いに、柳生の伴としてハッキリ答えてもらわねばならぬ」

「これはまた、改つたご口上。何でござりまする」

「その方、この父の封禄が何程か存じておるか」

ひたと視線を白哲の額に据えて問いかけると、金魚の肌そのままの友矩の顔に、かすかではあつたが狼狽のいろが動いた。

「お父上の封禄……一万と五百石かと」

「そうじゃ。総目付として、このたびはお城の普請奉行を兼ねた。それで二千石ご加増と仰出されたを、堅くご辞退申上げています。しかし……」

といて声をおとし、

「その辞退をお聞き入れはない。それゆえ、嫌々ながら一万二千五百石になるかも知れぬ」

友矩は、黙つてうなだれてしまった。もはや、父が何をいい出すかを感じ取つた様子なのだ。

「その方、父が、どれほどご加増を嫌うて来たか、存じ

ていよう。ご先代、ご当代と、幾度ご加増を仰せ出されても、宗矩はずっとこれを拒んで参った。父祖伝来の三千石を、権現さまに安堵されて以来、ご加増を堅くご辞退申上げること三十二年……むろん、その間に功がなかつたわけでも、かくべつ貧乏が好きであつたわけでもないぞ」

「……」
「大坂夏の陣に、ご先代秀忠公のお生命を助け参らせたり、次いで坂崎出羽守の騒動をおさめたとき……何れも大名におとり立て下さると、強つてのご内命を拒んで来たのだ。このたびもな、そうした話はむろんあつたわ」

「……」
「天草の乱も済んだことゆえ、大和高取の五万石を加増しようと思はされた。むろん、この父がそのような加増を受けるわけはない。何とぞ高取城は、植村出羽守家政どのに下しおかれるようにと、ご意見申上げた。植村家は、その方も存じていよう。権現さまの祖父君にあられる清康公以来のご譜代で、忠誠第一のご家系じゃ。それが、権現さまご嫡男の岡崎三郎信康さまに付されたばかりに……信康さまご自刃の後是他郷へ流離……ようや四代目の家政どのに至つて、ご先代秀忠公の小姓に召し出された。またまた、大坂冬・夏の陣に武功を立てら

れ、追々加増されて九千石ながら、いまだ大名の列には加えられておらぬ始末じゃ。それゆえ、先ずこの名家をお立て下さるよう……そう申上げたところ、將軍家には殊のほか不機嫌にならせられた。五万石では不足で辞退とご解積なされたい。それゆえ、父は、その五万石よりも、宗矩には欲しいものがござる……と申上げた。坂崎出羽が取潰されたおり、公儀のお蔵に収納された山姥の槍、あれが欲しい。五万石は植村どのに賜わり、山姥の槍をせひとも宗矩に下されたいと……そして、それをご聴許と決つたのだが、この父の心が、そなたにわかるか」

友矩は、小刻みに震えだしている。一言も言葉返さないのは、大名お取立や家光のお墨付のことが、根も葉もない噂ではなかつたからに違いない。

宗矩はジリジリとこみあげる怒りをおさえて、いよいよ言葉を粘らせた。

腹立ちの浅い時には爆竹のようにボンボンと叱り、声の柔かく粘る時には、その怒りが極度に深く沈潜している場合であつた。

父は、やはり恐ろしい。しかし、父の考え方が、子である友矩と全くおなじであるはずはない。友矩は嫡男ではないのだ。柳生家を継ぐものは十兵衛三蔵。さすれば、二男の友矩は新しく家を興すことになるのだからと、

別の分別で、実は家光に甘えて来た。旗本たちの白眼視を見返したい気持もあったし、「大名」の地位へのあこがれも無くはなかった。

むろん、友矩の方からせがんだものでない事はいうまでもない。が、噂のとおり、やがて大名に取立ててやろうというお墨付をもらってあるのは、事実であった。

はじめは三万石であった。それが四万石となり、五万石となって、やがて十三万石になった。

それは福阿弥の耳に入っているとおり、寛永十一年の八月十七日、家光上洛の帰途のことであった。

その夜、家光は無事に上洛の済んだことを祖霊に報告するため、駿河の久能山に詣でて一泊した。

その夜の家光は、どこか異常であった。京で太政大臣の昇任を勅使が告げて来たのを、太政大臣は祖父家康ほどの大功臣なればとにかく、われわれ凡庸な將軍の冒すべきものではない、おそれ多いゆえご辞退申上げるといったおりの、慎重な家光とは別人のように浮々していた。そして閨に召された友矩に、友矩の方で啞然とするような「十三万石のお墨付」を認めてくれたのだ。

友矩も、何度かその事を父に話そうかと思った。なぜか話すことが惜しまれた。

気まぐれな家光だ。あとで気が変わることがあるかも知れない。何か気に召さぬことのあったおりに、あの墨

付を返せ……といい出しかねない。そうなると、家光が父に笑われそうな気がして、何となく羞しかった。

あるいはこうした心遣いが、すでに、將軍と側臣の感情を超えて、世のつねの妻が良人をかばうような、ふしぎな関係に逸脱していたのかも知れない。

とにかく、自分だけで、そっと函底におさめておいて)

それは、世のつねの若者がわが身に寄せられた恋文を、ひそかに手放しかねる感傷に似たものだった。

たとえ、大名にはなりたいたいと思っても、十三万石……などとは思っても寄らない。したがって、返せといわれたら、何時でも返すつもりであったが、それが父の耳に洩れようとは……。

「一言もないところを見ると、お墨付の噂は事実だ。なあ、刑部」

父の言葉は、いよいよ粘りを加えて来た……と思ったとたんに、宗矩はふつと語調を変えていった。

「いや、事情がわかれば改めて、そちの口から聞くまでもあるまい。そうだ。久しぶりにやって来たのだ。一本手合わせをしてやろう。鞆たばを持って庭へ出るがよい」

友矩はホツとして、父を仰ぎ直した。家光の気まぐれをよく知っているので、父は事情を理解してくれたのに違いない。